要約から感想文への指導

――小説教材の場合――

橋本泰忠

(一) はじめに

ただ漠然と小説を読みすごして、あいまいな印象と誤った、或いは判然としない読後感をなんとかして排除したいと考えて、次の方法を採ってみた。

(1) あらすじの正確な把握《文章化する》
(2) 主題の把握
(3) 感想文を書く

すなわち、全体の小説のストーリーの展開を正確につかみそれを文章化することにより、生徒の積極的な読み方を身につけさせるとともに、鮮明なイメージをまず持たせ、主題を想定し、正しい感想(少なくともあらすじの誤解や、内容の不理解による感想でないもの)を持たせて、文章化させる方法を採った。合わせて、感想文の書き方の最も基礎的な方法を習熟させ、表現力の養成を目標とした。

(二) 「城の崎にて」の指導案とその結果

。使用教科書　旺文社新編現代国語2

対象、東筑高校、二年七組45名(男24女21)

＜指　導　案＞

第一限

(1) 全体を五段落に分けることを指示し、黙読をしながら、各段落毎に、あらすじを、簡単にノートにまとめることを課す。分量は大体200字以内にすることとする。

第一段落P176 4行～P178 4行
第二段落P178 5行～P180 8行
第三段落P180 9行～P183 4行
第四段落P183 5行～P186 11行
第五段落P183 12行～P183 13行

＜結　果＞

(1)段落に分ける場合は、全体の構成に基づいて、できるだけまとめやすい様に「～の場面」と小見出しがつけれる程度に区切った。

全体を五段落に分け、各段落毎に、丹念に読んで、全体の流れに沿って、あらすじをまとめさせた。あらすじを読んで、全体の流れが、まだこの小説を読んだことのない人にも分る様に書く様にとの指示もした。さらに「城の崎にて」の場合は、短編小説であるので、最後にもう一度全体を圧縮してまとめさせる様にした。

(2) 意味不明の語は少ないので、次の語句を板書しその意味を説明する。
(イ) 山狭、(ロ) 羽目、(ハ) 虎斑、(ニ) 動騒、(ホ) 拘泥する。
(3) (大部分の生徒が、(1)の作業を終えていることを確認して)
※第一段落について
(イ) 指名読み 1名
(ロ) あらすじを発表(2〜3名)
(ハ) 内容の精読。
(ニ) 小見出しをつける。
(ホ) あらすじで押えるべき点を確認して、各自誤りがあれば朱書して訂正を行うこと。

第二限

(4) 第二段落について
(イ) 指名読み 1名
(ロ) あらすじを発表(2名)
(ハ) 内容の精読
(a) 名文と指摘された箇所(谷崎潤一郎による)の発見。
(b) 「笵の犯罪」の紹介
(c) 「ほかのはちがみんな巣に入ってしまった〜いかにも静かだった」の「静かだ」とはどういうことが「静かだ」なのか。
(d) 「その前からかかっている長編の主人公の考え」と

(ロ)あらすじの発表については、学力が中程度以下のものを主に指名した。以下、ある生徒というのは、その中の生徒の一人である。
問題になったのは、第二、三、四段落あたりで、まとめ方がだんだん怪しくなってきた。
(3)の(ロ) 第一段落のあらすじ
或る生徒の例
≪山の手線の電車にはねとばされて、けがをした作者は、後養生に城の崎温泉へきた。一歩まちがうと今ごろは死んでしまっているところだと思うと生きていることに感謝しなければならないはずなのに、妙に死に対する親しみが起ってきた。≫
(3)の(ニ)、小見出しは≪城の崎温泉へ行くまでの経過と死への親しみ≫とつけた。
(3)の(ホ)、あらすじの訂正は全体を通して行うことにし、各段落の内容の精査を終えた段階で行うことの指示をする。
(4)の(ロ)、第二段落のあらすじ
或る生徒の例
≪読み書きに疲れると、玄関の屋根へ出入りするはちの動きをながめていた。ある朝、一匹のはちの死骸を見たが、いかにも寂しく又静かな感じがして、死の静かさに親しみを覚えた。≫
(4)の(ニ)、小見出しは、≪はちの死を通して、死への静寂への親しみ≫とつけた。

は、どんな内容になるか。

(二)小見出しをつける。

(5) 第三段落について

(イ)指名読み（一名）

(ロ)あらすじ発表（三名）

(ハ)内容の精読

(a) 指示語の内容の正確な把握

あれが（P181の14行）

そう言われても（P182 15行）

それは、それが（P182の17行）

両方がほんとうで（P183の2行）

(b) 「あるがまま」で「気分で願うところ」の「で」の働き。

(c) bの「あるがまま」を本能、「気分で願うところ」を知性に（ほぼ、相当するとの説明。）

(二)小見出しをつける。

(6) 第四段落について。

(イ)指名読み

(ロ)あらすじを発表（二名）

(ハ)内容の精読

(a)「生きものの寂しさ」とは何か。

(b)「生きていることと死んでしまっていることと、

(5) 第三段落のあらすじ

或る生徒の例

≪ある午前、首に竹ぐしをさされたねずみを、川へ投げ込み、人々が石を投げて殺そうとしていたのを見た。ねずみは死ぬにきまった運命を担いながら、全力を尽して逃げ回り、助かろうとしている。その様子が妙に頭に残りいやな気持ちがするが、自分も事故の時も、ねずみと同じことをしたことを想い出し、仕方がないと思った。≫

(5)の(二) 小見出しは、≪ねずみの死に至るまでの動騒をみて死への親しみがうすらぐこと≫

(6) 第四段落のあらすじ

或る生徒の例。

≪ある夕方、散歩へ出ると、あたりの静かさが妙に私をそわそわとさせた。川岸に、いもりがいたので、驚かすつもりで石を投げると、偶然にもいもりに当り、いもりを殺してしまった。全くの不意の死であった。自分は生き物の死は偶然によって大きく左右されるという感じを強くもち、生きもののさびしさを感じ、生きていることと死んでしまっていることとそれほど差がない様に感じた。≫

(6)の(二) 小見出しは「いもりの不意の死を通しての死への恐れ」とつけた。

(7) 第五段落のあらすじ

或る生徒の例

それは両極ではなかった。」とはどういうことか。

(c)それがいつそうそういう気分に自分を誘っていった。」の部分の指示語の内容はなにか。

(二)小見出しをつける。

(7)第五段落について。

(イ)、第一段落と第五段落の照応を調べ、短編小説の終り方の特長の説明を行う。

(8)500字の原稿用紙を作成、配布して次の三点を順に書くことを指示し、残りの時間内（約30分）で作成し、回収することを指示。

(1)全体のあらすじを100字程度に、圧縮して、まとめること。

(2)主題について書くこと

(3)感想を残りの部分でまとめること。どうしても足りない人は、後一枚の原稿を使うこと。

但し、(2)主題、(3)感想は、区別しないで、まとめて書いても良いとの指示もした。

補足

作者についての説明は、この四時限目に簡単にふれるにとどめた。

≪三週間いて去った。それから三年になるが脊推カリエスになるだけは助った。≫

(8)あらすじ、主題・感想をまとめることについての狙い。

(イ)、主題らしきもの、感想めいたことについては、できるだけ触れない様にした。あらすじを正確に把握することで、主題が自から浮び上ってくるとの想定を確めたい気持ちからであった。殊に「城の崎にて」の場合は、作者が焦点を絞っているので理解しやすいと思ったからである。

又、時間が30分程度（正確には27分になってしまったが）で提出させた。その狙いは、いろんな書物を見て、利いた風な感想を書くのではなく、できるだけ、生の、素直な感想を聞きたいためであった。

(三) 結果とその反省

全員提出させて検討した結果、次の様になった。

(1) 一応全員指示通り、(イ)あらすじ100字前後、(ロ)主題、(ハ)感想の順に書いてあった。

(2) 分量については、一番少ないもので、340字前後で、400字以内のものが三名程度であり、残りは原稿用紙（500字）二枚程度のものの二名を除くと、ほぼ一枚の原稿を使い切っていた。

(3) 主題のとり方については、作者が焦点を絞って書いているので分りやすいとみえて一名を除いてほぼ全員が適当と認められた。

(4) あらすじについては、ほぼ適当と認められる。

(5) 感想の部分については、あらすじの誤解から生まれたものは、一人も見当らなかった。が、総じてあまり大差のない感想のようにも思われるが、内容を二つの型に分けると作者の心境に共感を示すものと、共感よりはむしろ反撥を覚えるものとに分れた。それはそれで結構だと思う。

(6) 反省点として、まずあらすじの正確さを確かめる方法がまずかった。口頭発表で一応の把握はできたが、ノートに書かせるのでなく、用意した原稿用紙に書かせて提出させる方が、具体的に個々の生徒のつまずきを正確に把握できる様に思えた。次回の小説単元「山月記」では、その反省に基づき、原稿用紙（500字）にあらすじを書かせて提出させる方法をとった。

(7) この方法による書き方について、次の記号を用いて、提出させた原稿用紙に記入させて集計した結果は以下の通りである。

(A) 大変書きやすい　8名
(B) 思ったより書きやすい　14名
(C) ふだんと変らない　16名
(D) 大変書きにくい　7名

ただ、(A)と記入されている感想文の出来がよいとは限らず、(B)(C)の中に秀れた感想文もある。

作品(1)　H・T（男）

△電車にはねられけがをし、その後養生に城の崎温泉を訪れた作者は、親しみをさへ感じていた死に対し、はち、ねずみ、そしてイモリの死を通して、結局、それが（死への親しみ）が薄らぎ、偶然性に左右される生き物の寂しさを感じ、生と死の境のあいまいさを思いながら、そこを去った。という筋である。

人間というものは、なにかにつけて死を考える。そして、行きづまりを感じた時に死に対する楽しみを覚える。死というものが、何かしら静かな心の平安を与えてくれるものだと考えるのは、当然なのかも知れない。しかし、そう考えるのは、人間だけであって、他のいかなる動物も、死を望まない。彼らは自分がかならず死ぬとわかっていてもはかない努力を最期まで続ける。そして、この小説にみられるねずみの最期の動騒は、静かで、おだやかなはずの死に対し、死に到るまでの恐怖を感じさせる。

死の偶然性、イモリの不慮の死、それは、死というものが、寿命が尽きるという場合でなく、当然の到来をみせる恐ろしさであろう。それ故に、人々は死に対し限りない恐怖を覚える。

我々は、死というものは、こういうものだという概念を必死になって持とうとする。そうしなければ生きて行けない。

作者は、死ぬかもしれない傷を負うことによって、その根本命題を自分の考えの中心に持ちだした。そして、少なくとも生と死との境界はあいまいなものだとの結論を導き出した。いやそこまでしか導けなかったのかも知れない。なぜなら、それは、人間にとって一番興味があるにもかかわらず、少しも分っていない問題だからである。≫

（書き方の評価として、(B)、すなわち「思ったより書きやすい」として有るものである。）

次の例は、(C)、すなわち、「ふだんと変らない。」としている生徒の作品である。

作　品 (2)　　J・T（女）

≪電車にはね飛ばされてけがをした作者は、後養生に城の崎温泉へ出かけたが、自分が偶然生きていることや、はち、ねずみやいもりの死に接し、生と死との境界はあいまいなものであることを感じた。（あらすじ）

主題は、生あるものには、必ず死が訪れる。それは絶対的なものである。しかし、生と死は両極のものではなく、偶然に左右され、その境界はあいまいなものである。という事になる。

私たちは、死というものについて無残な想像をして、避けることができるものならば死に到達したくないと願っている。また死というものは絶対的なものであるということも自覚している。そう、いつも思っている反面、私たちは悲しいこと、苦しいことに出合った時、自ら進んで死を選ぶことが有る。これも一つの運命であるかも知れないが、本当の、そして作者がここであげている死ではないと思う。死とは自らの意志や希望にかかわりなく訪れるものであり、そんな死を心のどこかで待ち続けているのが人間の本当の一生であり運命であると思う。作者は私たち読者に、生と死の境界はあいまいであるということを教えて、いつ死ぬかもわからない運命を担いながらも、今生きているこのときを大事に過ごしてほしいと願っているのではないかと思う。そして運命を運命として素直に受け入れられるかどうかは、各自の問題だという事だと思う。≫

又、次の例は、記号(A)、すなわち、「大変書きやすい。」と記入している生徒の例である。

作　品 (3)　　T・S（男）

≪あらすじ、事故で命拾いをした作者が、療養にきた城の崎温泉で、いろんな動物の死を見て、生と死とが裏表であると考えるようになったこと。

（主題）死とは生物にとって、生きていることの裏側として常に隣り合せにあり、偶然ある時に生と交代する自然なものであるから、生きていることと死んでいることにはそれほど差がないということ。

（感想）生と死とは隣り合わせには違いないだろうが、大差ないとは思わない。作者は死んだはちを見て静かだというが、それは勝手に作者が外から見て思うだけであって死んだはちが静かさを感じているわけではない。やはり死とは無であり、死んでしまってはおしまいだと思う。それに生から死への境はふとしたことで越えられても死んだ者は生き返らない。生から死へ越えられても、死から生へ

の逆転はない。生物はやはり字の通り生きている間がすべてだと思う。だからこそ生物は死ぬのを恐がるのであり、それはしかたないことだと思う。そしてその方が、悟ったみたいな顔をするよりも、人間的というか、自然で活気があっていい気がする。》

（四）

「山月記」の指導過程とその結果

続いての小説単元は中島敦の「山月記」であった。指導の方法は、もう一度同じ方法を採用したので、細かい事項は省略をするが前回の反省に基づき、少し変えてみた。

(1) 全体を6段落に分けることを指示し、各自黙読を行ない未知の語句に一線を引かせ、調べてくる事を課題とする。

(2) 各段落（場面）毎に要旨をまとめ、全体のストーリーがよく分る様に、500字以内でまとめてくることを指示し、原稿用紙を配布する。

(3) あらすじを各グループ（7～8人編成）で回し読みをし、各グループで一番秀れていると思われるものを一名選び発表させる。

(4) 全部で6編の発表を終えた段階で、全員のものを回収して、検討を加えてみた。その結果は次の通りである。

(A) 完全なもの　5名

(B) ほぼ十分であるもの　11名

(C) 訂正・削除・添加を必要とするもの　26名

(D) 大はばに悪いもの　3名

(5) 以下、各段落毎（場面毎）に授業を展開した。前回と同じ授業形態なので省略する。

(6) 全部の授業を終えた時点で、回収していたあらすじの原稿を返却し、各自添削の作業を課した。添削が行なわれていた原稿は、24枚あった。

(7) 今回は少し長め（字数500字前後）に感想文を書かせるため、一時間をとり、時間内に書かせて提出させた。

二、三名を除いて大体500字前後にまとめてあり、前回とほぼ同様の出来であった。

次に、どのようなあらすじを書き、どんな添削が施され、どのような感想文を書いているか、その関連性がよく分る作品を三つあげる。例Ⅰは、かなりの修正が施された例であり、例Ⅱは部分修正を行った例であり、例Ⅲは添加の例である。

（例Ⅰ）　S・K（女）

《李徴は、博学才穎で若くして進士になり次いで江南尉になったが、睦吏に甘んずるを潔しとせず、官を退き詩作にふけった。しかし、文名は揚らず、貧しくなり、かつて彼が鈍物としていた同輩の下命を拝す一地方官吏となるに至った。往年の儁才李徴は自尊心を深く傷つけ、ついに発狂し、行方をくらました。

その翌年、李徴の旧友の袁傪が、朝暗いうちに、人食い虎となった李徴に出会った。《以下削除の部分》《彼は李徴の旧友で、虎となった李徴は、恥ずかしいことも忘れ、しばらく彼と話を交わした。袁傪は少しも怪しもうとせず、草むらの傍に立ち、見えざる声

と対談した。その声は、今の身となるに至った経過を次のように語った。

一年前、旅の夜、戸外で呼ぶ声を追っていくといつのまにか道は山林に入り、自分の手は地をつかんでいた。明るくなってから谷川に姿を映してみると虎になっていた。そして人間に還る時間でさえ短くなってきた今、完全に虎となるのを恐れ悲しく思う。その声は、袁傪に詩数十と妻子のことを頼んだ。そして帰途には決してこの道を通らないようにいった。》《以上の部分を添削して以下のように改めている。》

《草むらに姿を隠した李徴は、旧友袁傪としばらく話を交わした。虎の身になるに至った経過を話し、人間に還る時間が次第に減り、虎となっていく悲しみを訴え、生き物の宿命論や生まれ変わり説を信じこむことによって無理に人間への執着を絶とうとしていた。李徴はさらにことばを続け、いまだ記誦している数十の詩の伝録を頼み、即席の詩を朗して懐いを託した。

さらに、自分の性情のために虎になったことを告げ、また、自嘲しながら自らの愛情の不足を述べ、残してきた妻子のことを親友に頼んだ。》

袁傪と虎になった李徴は、涙のうちに別れた。袁傪がいわれた様に丘の上からながめると一匹の虎が二声三声咆哮して姿を隠した。

感想文

≪人間性を失うことが、どんなに恐ろしいことかをまざまざと見せつけられた。利己主義で愛情に欠けるため、人食い虎となってしまった李徴。彼の臆病な自尊心と尊大な羞恥心はとうとう彼自身をつぶし、破滅させた。相当な才能にめぐまれながら、自滅してしまうとは、彼自身おもいもかけなかったことだろう。

彼は、自分の運命を嘆き、生き物の宿命論や生まれ変わり説をとなえて、無理やり自分を納得させ、慰めて気をまぎらわそうとする。人間の心が次第にうすれ、そのかわりに猛獣として狂い回る姿を想像しただけでも恐ろしいからであるが、ここにも、外ならない人間であるしるしが見られる。論理化し納得しなければ生きていけない私達の一面がよく描かれていると思う。

自分の性情をよく知りうまくあやつることができれば、李徴だってこのような超自然の怪異ともいうべき恐ろしい目に会わなくてもすんだだろうが、人間にとって、自分自身の性格をしっかりと把握しあやつることが、いかに難かしいかがわかる。

最後の場面で、多勢の供をひきつれ丘の上に立つ袁傪（それは、詩に魅せられなかったら多分なれていたであろう李徴の姿と思える。）と日を仰いで咆哮する人食い虎となった李徴の姿は、どうすることもできない現在の境遇の差を感じ、印象的で哀しい。≫

例Ⅱ　　H・K（男）

≪隴西の李徴は博学才穎で、若くして役人となったが、他人とあまり妥協しない性格で、役人をやめて故郷に引き揚げた。そこで詩家として名を残そうとしたが、文名は容易には揚がらず、再び役人になった。が、かつての同輩に比べて地位が低いことや、詩業に絶望したことで、汝水のほとりに宿った時、ついに発狂し、行方不明になってしまった。

翌年、監察御史の袁傪が人食い虎が出るという道を行くと、虎が本当に現われ驚くべきことには、虎が人間の声で話し、しかもそれが旧友の李徴であった。親友だった二人は人と虎ではあるが親しく話をし、虎になったいきさつを語り、詩の伝録を頼んだ。又、李徴の語る即席の詩をききながら袁傪は、なにか欠けているものを感じていた。李徴は、次第に人間でなくなって行く悲しみを語り、己の性情のために虎になったという。

《以下、削除の部分。》(人間の心でいられる時から、虎の心に戻る前、李徴は袁傪に自分の妻子が飢え凍えることのない様に取り計らって欲しいと頼み、再び草むらの中へ消えて行った。)

《以下、加筆訂正の部分。》(最後に李徴は親友袁傪に残してきた妻子のことを頼み、飢え凍えることのない様に取り計らってほしいと頼み込み、己の愛情の乏しさを告白した。そして袁傪に二度とこの道を通らない様にと告げて虎になっている自分の姿を見せて、草むらの中に姿を消した。)

感想文

≪どうして李徴は虎の姿に変わってしまったのか。博学才顕で若くして虎榜に名を連ねたはずの彼が、である。彼の持っていた性情—臆病な自尊心と尊大な羞恥心—が、あるいは性格が心が、周囲の人々は気付くはずがなかった。その矛盾—周囲から見られている自分と自分で思っている自分との開き—が余りに大きすぎたのだ。

すばらしい才能を持ちながら、その性情=猛獣のために、その才能を空費してしまった。にもかかわらず詩に没頭して妻子を省みることがなかった。

彼の詩が「超一流」の素質は認められるが一流の作品となるには欠けている「どこか」という袁傪の気持としては、人間らしい愛情の乏しさと、才能が磨かれていなかったことを言うのである。それはそのまま彼自身の性格の欠けている所ではなかったか。

人間誰しも、愛という最も人間的なものを失えば、恐らく人間ではなくなるだろう。そして、自分の性質を自分がよく理解し、うまくコントロールしなければならない。「人間だれでも猛獣使いなのだ。」という李徴の言葉が印象に残る作品であった。≫

例Ⅲ　　S・G(女)

≪隴西の李徴は俊才であり官職についていたが俗界に伍することを潔しとせず、詩業に志し官を退き詩作にふける。が、名声を得ることもなしに、再び官職を奉ずる。しかし、かつての同輩、しかもその当時歯牙にもかけていなかった者達の前に膝を屈することに耐えられなかった彼は遂に発狂し消息を絶った。

その翌年、李徴の旧友である袁傪は、思いもかけず彼に再会するが、その姿は虎になり果てていた。驚いたものの袁傪は、その彼と親しく言葉をかわす。李徴は、異類の身となったいきさつや、もはや詩業も成し遂げ得ない事への断腸の思いを袁傪につげる。そしてこの様な運命を背負わざるを得なかった背景について彼なりの自己分析を行う。《添加の部分『自己分析を行い、臆病な自尊心と尊大な羞恥心とのために虎になったと言う』。》そして彼は僅かに記憶に残された往年の作品を旧友に託し、残された自分の家族への厚遇を依頼する。二人は悲痛な思いを抱きつつ別れるのであったが、

最後に彼は、それまで隠していた己が姿を現し、無念の思いをこめた咆哮を残して、草むらの中に姿を消すのだった。≫

感想文

≪李徴について考えると、他ならぬ自分自身の性格から、どうしようもない所にまで自分を追いつめざるを得なかったこと、そしてそうなる前に自己をとどめられなかった事に非常な不幸を感じる。全く性格の悲劇だ。

人間誰しもそれぞれの気質というものがある。それが温厚なものであれば、実社会で生きていくうえで幸いであろうが、李徴の場合はどうだろう。はたしてうまく行くか。

もちろん彼は、そういう社会に適応し難い気質をそのままにしておくべきではなかったのだ。自分でも語っているとおり、性情という彼にとっての猛獣を制御すべきであったと言えるだろう。しかし、だからといって彼は愚か者だったのだなどと、あっさり片付けてしまえないという気が強くする。誰にしろ自分の生来の性情を思うままにすることは決して易しいはずはない。多かれ少なかれ、人間誰しも持つ弱さでありもどかしさであろう。

ただ、そんな中でも、彼が自己の心に余裕のようなものを持てていたらと思わずにはいられないのだ。彼は悪い意味で真面目すぎたし、ひたむきすぎた。それは若さの精なのかも知れないが、中途半端な自尊心でなく、全くあっさりと自分を笑いとばしてしまえる余裕を持ってでもいたらと思う。≫

(五)

≪全体的な反省と今後≫

この、あらすじから感想文への授業をしてみて気付いたことに、小説から各自が読み取っているものから（各自が理解をしたあらすじから）多くの感想が生まれている事が分る。殊に「山月記」のように幾らか分量の多いものは、その事が顕著に表われている。長編になればなるほどその傾向は強いものになり、木を見て森を見ず式の感想文が多くなるはずである。今回の試みは、いくらかでもそういう弊害が取り除けたように思える。もっとも、小説の面白味は、その要旨をとらえることのみによって得られるものではない訳で、いわゆる『細部』にも存在することは言うまでもないが、所期の目的（誤解に基づく感想・内容の不理解に基づく感想を排除すること）は、ほぼ達成できたように思う。又、感想文の内容については、質的な差は認められるものの、量に限っていうと、二・三の生徒を除くと規定の字数を充たしていたことも一つの収穫だと思える。

今後は、比較的分量のあるものを課して、要約を書かせて、四五枚程度の感想文ないし研究的な論文を書せてみたいと考えている。

（福岡県立東筑高等学校教諭）